

# 杲宝説『伝宝記』と『開心抄』

## ——杲宝の禅宗批判の教学的背景——

千 葉 正

### 一 はじめに

十四世紀、京都・東寺において活躍した真言宗の学僧、杲宝（一一三〇六—一三六二）は、東寺教学を大成させた人物として知られている。そして、杲宝は、かなり激しい禅宗批判を行つた密教僧である。

杲宝の禅宗批判は、杲宝以前の真言宗内部においては、余り例を見ない、かなり、特異な教学的な特色を示している。杲宝以前に、禅宗批判というより、禅宗に対して何らかの見解を述べていた真言宗の学僧としては、高野山の道範（一一七八—一二五二）と根来寺の頼瑜（一二二六—一三〇四）という二人の名を挙げる事ができる。

杲宝は、多くの著述を残しているが、特に、禅宗批判を行っているのは『開心抄』という著作である。この『開心抄』は上・中・下の全三巻からなり、なかでも上巻全体において禅宗批判がなされている。この『開心抄』上巻においては、あ

る特定の禅僧に対しての批判が中心となっている。その禅僧とは、杲宝とほぼ同時代に活躍していた虎関師鍊（一二七八—一三四六）と夢窓疎石（一二七五—一三五二）とである。これらの禅僧は、日本臨済宗に属する人々であり、いわゆる「禅密一致説」或は「禅密双修説」を主張していた禅僧である。したがって、杲宝の禅宗批判は顕密二教判、及び十住心の教判においては「九頭一密」の立場からの真言密教の優位性を説く点からのものであったと言える。

しかし、杲宝は前述のように、多くの著述が残されている。さらに、東寺教学を大成させたほどの、思想的基盤を有しているのでもある。その思想的基盤に関しては、東寺教学についての、いわゆる宗義決択書と呼ばれる『杲宝私抄』全十二巻、『アキシヤ鈔』全二十四巻などが著されている。これらの宗義決択書類においては、全く禅宗に関しては触れられていない。

また、杲宝には、『東宝記』全十二巻という、東寺の立場

をまるで、他の真言宗寺院の中でも、何か特別な寺院なのであることを主張するような、東寺の歴史を記した書も著している。

さらに、杲宝には「持戒清浄印明」の相承という、高山寺の明恵（一一七三—一二三二）系統との関係も指摘できる。これは、西大寺系真言律宗との関わりも、特に、京都、東山太子堂の良含（一二三四—？）、鎌倉、浄光明寺の高慧（一二八四—一三三八）〔浄土宗の僧〕、そして、大和国、生駒の竹林寺の性心（一二七八—一三五七）〔杲宝の師の一人の真言密教僧〕といった人物の名を挙げられる。

以上の三人の中、性心との関わりは深く、それは、性心が住していた生駒・竹林寺における行基の舍利の発見をめぐって『大和国生馬山行基菩薩御遺骨出現事』という著述を残していることから言える。したがって、杲宝は、行基信仰の持主でもあったのである。

それでは、本稿の副題に掲げている、杲宝の禅宗批判の教学的背景については、どうなのかという問題は、これまで、いくつかの杲宝の著作の内容の検討作業を行ってきたが、現状はというと「顕密二教判」の立場からの批判が中心であったということになる。

そこで、杲宝の『開心抄』上巻における、禅宗批判の教学的背景については同書の中で見られる、真言密教の教理的内

容から、ある程度、措定できるのではないかと考えられる。

そして、本稿では、宗義決撰書の一つとして知られる『伝宝記』を取り上げることにはしたい。この『伝宝記』という文献が、如何なる教的内容に基づいて、著わされているか、それは、この書の性格を考えてみると、非常に興味深いものなのである。『伝宝記』の内容構成に関しては後述するが、少し明してしまえば、空海の『即身成仏義』をめぐる論義書なのである。

したがって、真言密教が「即身成仏説」であり、禅宗が「即心成仏説」であることから、つまり、それは「身体」か「心」か、どちらの成仏を重視するかの問題ということになる。

以上の問題点に留意しつつ『開心抄』上巻の論義が『伝宝記』のどのような論義箇所に対応できるのかを検討していくことにする。

## 二 『開心抄』と『伝宝記』の内容・構成

まず『開心抄』の内容、構成について、以下にまとめてみる。『開心抄』は上・中・下巻の全三巻から成る。撰述年代は、貞和五年（一三四九年）九月から十二月にかけて著わされる。上巻は、前述のように、全部が禅宗を論じている。その内容は「禅宗属顕門、達磨私建門、機教前後門、過失揀扱門、末世相応門、護国済生門、証道唯密門、心体同異門、秘密修禅

門」の計十篇から成る。

中巻は「煩惱・菩提」の問題に関して「即身成仏門、煩惱即道門、煩惱仏種門、三毒曼荼羅門、即惡秘密門、不斷煩惱門、斷除煩惱門、不如実知門、無明縁起門、妄覆真覺門」の十篇から成る。

下巻は「即事而真門、俗諦常住門、一塵法界門、即離分別門、事理建立門、理趣本性門、法性自徳門、二見同異門、法界一多門、相与無相門」の十篇から成る。『開心抄』全三巻の全篇が問答体になっていて、諸宗派の教理を論難し、宗義の奥旨を明確にすることに努めている。

次に『伝宝記』（江戸時代の明暦元年（一六五五年）の刊本）、今回は、駒沢大学図書館所蔵の刊本を用いる。全六巻から成る。杲宝の説（口説したものか？）を編集した書である。内容は、空海の『即身成仏義』に出てくる宗義に関して、百三十条を選んで問答論義した決撰書。構成は、紙幅の制限上、全篇は載せないが、いくつかの章を取り上げてみる。第一巻に「八識発心、六大四曼分別、心法色形、成仏本有修生等」、第二巻に「発即到、一切真言行者即身成仏、即身成仏身心不同、遍計所執捨不捨、顕教中説三摩地法否、六大互無碍相應等」、第三巻に「凡聖能成六大麁細分別、草木成仏、般若瓔珞両経所説六大、四相常住等」、第四巻に「三密三身相配、顕密円融同異、心王心数分別、六大法身、六大無碍、六大四

曼名数増減、画木等形像有法界宮、四曼四智印差別、三密用大中撰体相一大否等」、第五巻に「即身成仏道理、大小二機分別、法華最深秘処、依三摩地即身成仏、以父母所生肉身直証仏身、頓漸超三機同頓証、以六大為即身成所依、五字門字相字義等」、第六巻に「凡聖所具曼荼羅体性同異、三密金剛為増上縁、五大迷悟分別、心数名多一心識、成仏位捨有漏身歟、成仏実義限真言歟、即身成仏人証、即身成仏義通両部教相歟、三品悉地即身成仏等」、と以上のような内容の論義から成る、杲宝による東寺教学の宗義決撰書である。

### 三 『開心抄』と『伝宝記』の記述の検討

まず、杲宝の師の一人である、頼宝（一二七七—一三三〇？）の『諸法分別抄』「身心本元事」における、禪宗に関わる記述を検討してみる。この頼宝は、杲宝、賢宝（一三三三—一三九八）「賢宝は杲宝の弟子」と共に「東寺三宝」の一人として知られる。そして、頼宝にも宗義決撰書として『真言本母集』全三十四巻が著わされている。

この『諸法分別抄』「身心本元事」という章の冒頭に、「身心二共雖実相体。顕密所詮旨趣各別也。」と述べられている。この冒頭箇所において「心」と「身体」とは、顕・密二教、その捉え方と意味するところが違うのであると区別を

着けている。

そして、「心」と「体」とを、次のように論じている。

心近<sub>レ</sub>理。身当<sub>レ</sub>体是事也。是故諸教多名<sub>二</sub>心理。然仏果内証遮情表  
德二門是別也。約<sub>レ</sub>心論<sub>レ</sub>体。以<sub>二</sub>遮情<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>極。約<sub>レ</sub>身論<sub>レ</sub>体。以<sub>二</sub>  
表德<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>功。是故表德実義。但依<sub>二</sub>色身実相義<sub>一</sub>也。

この箇所では、真言密教の独自の「遮情・表德」の二門の  
立場から、「心」と「身体」とが論じられている。「遮情・表  
德」という在り方は「遮情」とは凡夫の迷情を遮絶して否定  
的消極的に表わすこと。「表德」とは果位に立つて肯定・積  
極的に密教の極意の徳を表顕することである。したがって、  
頼宝は「身」を表徳門に位置づけ、さらに、表徳門は「色身  
実相義」とまで論じている。

次に、具体的に、禅宗を論じている箇所をみてみたい。そ  
れは、次のような問答において、論じられている。

問云。顕密教法雖<sub>レ</sub>異。善悪作業皆以<sub>レ</sub>心為<sub>二</sub>先導<sub>一</sub>。是通例也。法  
相大乘依<sub>二</sub>三界唯心經文<sub>一</sub>。万法唯識所變為<sub>レ</sub>宗。…(中略)…説楞  
伽經云。未<sub>レ</sub>達境唯心。起<sub>二</sub>種種分別<sub>一</sub>。達<sub>二</sub>境唯心<sub>一</sub>。已分別即不<sub>レ</sub>生。  
知<sub>二</sub>諸法唯心<sub>一</sub>。便捨<sub>二</sub>外塵相<sub>一</sub>。由<sub>二</sub>此分別息<sub>一</sub>。悟<sub>二</sub>平等真空<sub>一</sub>。…(中略)…  
一門以<sub>レ</sub>之為<sub>レ</sub>極。觀無量壽經云。諸仏如来是法界身。入<sub>二</sub>一切衆  
生心相<sub>一</sub>。是故汝等心想<sub>レ</sub>仏時。是心即是三十二相八十随好。是心  
作<sub>レ</sub>仏。是心是仏。諸仏正遍智海從<sub>二</sub>心想<sub>一</sub>生。善導一家以<sub>レ</sub>之為<sub>レ</sub>  
要。是以觀經十六想觀。皆是心法上建立也。起信論三界虚偽。唯  
心所作<sub>云云</sub>。又唯是一心故名<sub>二</sub>真如<sub>一</sub>。…(中略)…達磨大師血脈論云。

三界混起。同歸<sub>二</sub>一心<sub>一</sub>。清涼国師還源觀云。三界所有法。唯一心  
造<sub>云云</sub>。諸經論文。諸大乘師。同以<sub>レ</sub>心為<sub>二</sub>本体<sub>一</sub>。密教何必大異乎。

以上、かなり長い引用となつてしまつたが、この箇所では、  
「顕密二教」と共に、善・悪の行為は「心」が導き手となり、  
あらゆる行為が「心」に由つてゐるのだと説かれる。その後  
に「法相大乘、三論宗、法華一乘(天台)、花嚴經、楞伽經、  
及び達磨血脈論(禅宗)、又は達磨一門、觀無量壽經・善導  
一家(浄土宗)」と、真言宗以外の大乗の法門(顕教)のすべ  
てが「心」を究極の境界と見做してゐることが分る。

そして、頼宝は、空海の『御請来目録』からの一説を引用  
する。それは、「大師御釈詁<sub>二</sub>一心利刀<sub>一</sub>顕教。揮<sub>二</sub>三密金剛<sub>一</sub>  
密藏<sub>云云</sub>」という箇所であり、正しく「一心」という「心」  
を重視しているのが顕教であることを述べようとしている。

では、『諸法分別抄』の、この箇所が、杲宝の『伝宝記』  
においては、『同記』巻二に立てられてゐる「即身成仏有身  
心不同歎事」という論義に関わるものと言える。

ここでは、次のように論義されている。

於<sub>二</sub>即身成仏<sub>一</sub>有<sub>二</sub>心身不同<sub>一</sub>所謂大疏<sub>ニハ</sub>即心成仏<sub>云云</sub>菩提心論<sub>ニハ</sub>即  
身成仏<sub>云云</sub>付<sub>二</sub>此兩説<sub>一</sub>自他門<sub>ニ</sub>意樂不同也。他門義雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>身心各  
別<sub>一</sub>。且<sub>レ</sub>旃論<sub>ニ</sub>本末者以<sub>レ</sub>心為<sub>レ</sub>本以<sub>レ</sub>身為<sub>レ</sub>本。…(中略)…故  
仍智証大師破<sub>二</sub>有人説<sub>一</sub>成<sub>二</sub>自義<sub>一</sub>時。他師<sub>ハ</sub>身勝心劣<sub>云云</sub>。自義<sub>ハ</sub>  
心勝身劣<sub>ト判ゼリ</sub>。此<sub>中</sub>他師<sub>ノ</sub>義<sub>ハ</sub>自<sub>ラ</sub>當<sub>二</sub>高祖所立<sub>一</sub>故<sub>ニ</sub>知<sub>リ</sub>。以<sub>レ</sub>身  
可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>本<sub>ト也</sub>。

この箇所では、智証大師円珍の「即心成仏説」、高祖、空海の「即身成仏説」とを比較を通して、台密が「即心成仏」を説き、東密（真言密教）が「即身成仏」を説いていることが明確に述べられている。

さらに、「同巻」では、次のように論義がされている。

問。即身ハ不レ転ニ肉身ニ義。即心ハ不断煩惱ノ意也。若シ然者ラバ。即心ノ義猶ラ可レ勝ト耶如何。答。身心両部ノ時ハ身ハ即チ胎蔵。心ハ是レ金剛也。随テ身ニ在レ心。身ハ体心ハ用也。然ラバ則チ不転肉身ノ故ニ不断煩惱也。此レ故ニ煩惱即菩提ノ義。雖レ説ク諸教ニ。肉身即仏体之旨。唯テ在リ此教ニ。

ここでは、正に「肉身」そのままが仏の本体であることが説かれている。つまり、究極の「肉身即仏説」と言えよう。

次に、具体的に『開心抄』の禅宗批判の教学的背景となり得る『伝法記』の論義の箇所を検討してみる。

まず、前述のように『開心抄』全三巻の中、同書上巻だけに禅宗批判が見られるのである。本稿では上巻の中から「本分極不門」と「心体同異門」の二章を取り上げてみたい。「本分極不門」では、次のような問いが立てられている。

問。依ニ釈摩訶衍論ニ立ニ有覚無覚両門。於ニ有覚門中有ニ五重問答。前四重四宗大乘。第五不二密教也。此上更立ニ無覚門。無覚門者義分符ニ契禅宗也。依レ之或禅者云。五問四答顯宗之怨。有覚無覚秘宗之愁。(中略) ……無覚門無ニ衆生又無ニ本覚。是禅

門所立本分田地也。若然者真言宗所貴不二本法。猶難レ及ニ此処如何。

ここでは『釈摩訶衍論』の「有覚無覚」の問題が取り上げられている。そして『釈摩訶衍論』の「不二摩訶衍」と禅宗の「本分田地」という、それぞれの究極の悟りの境界を比較している。なお、この「或禅者」の説は退耕行勇の弟子、大歇了心（生没年不詳）の『首楞嚴経疏』からの一説である。続けて、杲宝は、次のように、禅宗の「本分田地」を判ずる。

答。彼宗本分田地者何処。若無仏無衆生其処者。猶是弘ニ外塵ニ之方便。入ニ仏道ニ之初門也。大日経是名ニ初法明道。金剛頂是号ニ無識身三昧。南北二宗所帰未レ出ニ此域。

禅宗の「本分田地」について、この箇所において「仏道」に入る最初のあり方と評し、さらに『金剛頂経』で説かれる「五相成身観」の前方便の禅宗としての「無識身三昧」の段階にあるとも判ずるのである。この「無識身三昧」とは、身心共に寂滅無相の境に住する三昧である。

そして『伝法記』においては同書巻六に立てられる「成仏実義限真言歎事」という論義に相当できると考えられる。ここでは「仏果」と「成仏」とを比較しつつ、「仏果」を菩薩の位に位置づけた上で、「成仏実義独在此」教「高雄口決云。余宗ニハ名ニ究意ノ仏ト。此ノ宗ニハ名ニ為ニ一切義成就菩薩云云。(中略) ……金剛頂経ニハ約ニ已成仏ノ果人ニ作ニ驚覚」と菩薩の「仏

果」と「成仏」とを論じている。この中の「一切義成就菩薩」が住する三昧の境界が「無識身三昧」なのである。したがって『開心抄』上巻の「本分田地」に対して「無識身三昧」という評価は、正しく『伝法記』の中に見て取れる。

次に『開心抄』上巻の「心体同異門」について検討してみたい。この「心体同異門」では、「問。或云。経説三十七尊住心城<sup>云云</sup>心城者当<sup>三</sup>禅宗本分田地<sup>云云</sup>有<sup>三</sup>其謂<sup>三</sup>平。」という問いが初めに立てられている。ここでも、禅宗の「本分田地」の問題が取り上げられている。なお、この「或云」の言葉は、日本臨済宗の夢窓疎石の『夢中問答』「第六十三問答」からの一説である。ここでは、この「心体同異門」の一番、最後の箇所「釈摩訶衍論」の「第十識」である「一一心識」と「不二摩訶衍」とを同じに見た上で、「異朝通法慈行等師。解<sup>三</sup>摩訶衍論<sup>三</sup>時。以<sup>三</sup>禅門宗要<sup>三</sup>配<sup>三</sup>属<sup>三</sup>一心<sup>三</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>三</sup>不二心<sup>三</sup>。以<sup>可</sup>知者歟」と説いて、やはり「本分田地」と「不二摩訶衍」との比較を行っている。そして『伝宝記』では同記巻六の「心数名多一心識事」という論義に関連づけられる。紙幅の制限上、内容の検討は省略したい。ここでは「心識論」が、真言密教の方の「第十識」まであることを論じている。

#### 四 むすびにかえて

非常に、単純な比較、検討であったが、杲宝の禅宗批判の

教学的背景は、明確に、後の宗義決撰書の一つである『伝宝記』の中に、看取できたと考えられる。

（註は省略する）

〈キーワード〉

『伝法記』、『開心抄』、禅宗、本分田地、無識身三昧、即心成仏、即身成仏、杲宝、頼宝

（駒澤大学大学院満期退学）